

消費者志向自主宣言

令和7年度活動報告（フォローアップ）

株式会社ネオビエント

2025 年 12 月



[illegible]

[illegible]

[illegible]

あすたむらんど徳島

「あすたむ SUGOWAZA フェスティバル」の開催

■ 実施内容

春のあすたむ祭りの中核企画として
「あすたむ SUGOWAZA フェスティバル」を開催した。
高い技術力とホスピタリティを備えたパフォーマーを中心に選定し、
三世代で楽しめる大道芸パフォーマンスを提供した。
あわせて、県内で活躍するキッズパフォーマーを誘致し、
次世代の活躍の場を創出した。

実施期間：4月27日～5月6日



■ 成果（利用者の反応・数値等）

期間中の参加者数は 3,285 名となり、
復刻開催を望む利用者の声に応える形で実施した
大道芸パフォーマンスイベントとして、
高い集客成果を上げた。

チラシによる事前告知段階から多くの問合せが寄せられ、
再開を待ち望んでいた利用者ニーズの高さが確認された。

期間中は雨天や強風の日もあったが、
多くの来園者に観覧いただき、
本イベントに対する高い満足度と支持を得る結果となった。

「子ども実行委員会」の実施

■ 実施内容

あすたむらんど徳島を舞台に、
イベント運営を通じて「本物に触れ、本物を体験する」機会を提供する
ことを目的に、小学生を対象とした「子ども実行委員会」を設立した。
イベントと一緒に創り、盛り上げる過程を通じて、
成功や失敗を経験しながら
「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を育む取組とした。
今回は「クリスマス生ライブ」として、
ゲストに DW ニコルズ さんを迎え、FM 徳島の協力のもと実施した。

実施期間：12月22日（準備・活動期間：10月～）



■ 成果（利用者の反応・数値等）

ライブ本番では、
DW ニコルズさんの演奏と子どもたちのダンスが一体となり、
会場全体に一体感のあるパフォーマンスが生まれた。
また、ライブ出演に加え、
来園者への呼び込みや待ち列整理などの運営面にも主体的に関わり、
不安を抱えながらも積極的に行動する姿が見られた。

参加した子どもたちからは、
「チームで最後までやり切れたことがうれしかった」といった声があり、
成功体験だけでなく失敗経験も含めた取組が、
子どもたちの自信や今後を生きる力の醸成につながる成果となった。

あすたむらんど徳島

四国大学交流プラザ

「Happy Xmas 2024」の実施

ワークショップの開催

■ 実施内容

冬季の集客施策として「Happy Xmas2024」を開催し、テーマを「!Que emocion! ~ semifinal ~」と設定した。令和5年度よりイルミネーションを約1万球増設し、県内最大規模となる約41万球の装飾を実施するとともに、写真映えを意識したフォトスポットを新設し、園内を周遊しながら撮影を楽しめる構成とした。また、来園中に撮影した写真を即時に共有できる写真共有システム「ライブキャンパス」を導入し、体験価値の向上と情報発信力の強化を図った。

実施期間：11月30日～12月29日



■ 成果（利用者の反応・数値等）

期間中の夜間入園者数は36,462名となり、冬季イベントとして高い集客成果を上げた。

フォトスポットについては「写真を撮れる場所が増えた」「綺麗」といった声が寄せられ、回遊性と満足度の向上につながった。

「ライブキャンパス」では多くの写真投稿が行われ、来園者同士の交流促進や公式SNSでの発信にも波及するなど、体験と広報を両立した取組となった。

■ 実施内容

地域の幅広い年代の方に施設を利用していただくことを目的に、月1回のワークショップを継続的に実施した。

内容は、子ども向けから大人の女性向けまで、対象を限定せず多様なテーマで構成し、誰もが気軽に参加できる機会の創出を図った。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

参加者からは「毎回とても楽しく参加している」「次回も必ず参加したい」といった声が寄せられ、継続的に参加する常連利用者の定着につながっている。

月1回の定期開催により、施設利用のきっかけづくりだけでなく、地域における交流の場としての役割を果たす取組となった。

本社イベント事業

夏に清涼感のあるイベントの企画・運営

■ 実施内容

「とくしまマルシェ」において、
夏季の厳しい暑さの中でも来場者が快適に過ごせるよう、
清涼感のある催しを中心としたイベント企画を実施した。
5月には「アイスグランプリ」、
7月には「かき氷グランプリ」を開催し、
食を通じて暑さを和らげる取組を行った。
あわせて、飲食ブース周辺にはパラソルを設置し、
直射日光を避けられる環境を整えることで、
熱中症対策と滞在環境の改善を図った。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

来場者からは
「熱中症対策になるので夏場でも来やすくなった」
「日陰で購入した商品を食べられ、暑さを凌ぐことができた」
といった声が寄せられた。

これらの取組により、
夏季においても安心して来場できる環境づくりにつながり、
来場者の利便性および満足度の向上に寄与した。

渦の道・大鳴門橋架橋記念館

キャッシュレス決済の対応ブランド拡充

■ 実施内容

インバウンドの増加を踏まえ、
海外利用者を含む多様な来場者の利便性向上を目的として、
キャッシュレス決済の対応ブランドを拡充した。

現金を持たない来場者でも円滑に利用できる環境を整備し、
会計時の負担軽減とあわせて、
受付業務の効率化を図った。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

海外からの来場者を中心に利便性が向上し、
会計時の待ち時間短縮につながった。

来場者からは
「支払いがスムーズ」「安心して利用できる」
といった声が寄せられ、
施設全体の満足度向上に寄与する取組となった。



渦の道・大鳴門橋架橋記念館

案内サインの整備・更新

■ 実施内容

来場者が安全かつ迷わず施設を利用できるよう、受付ロビーを中心に案内サインの整備・更新を行った。

床面表示やピクトグラムを活用した動線案内を整備するとともに、工事期間中においては注意事項を明示した案内サインを設置し、利用者にとって分かりやすい情報提供に努めた。

あわせて、多言語表記を取り入れることで、訪日外国人を含む多様な来場者に配慮した案内環境を整えた。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

案内サインの充実により、チケット販売場所や購入方法、入場までの流れが分かりやすくなり、受付での滞留や問合せの減少につながった。

その結果、混雑時においても円滑な施設運営が可能となり、工事期間中においても、安全性と利便性を両立した運営を行うことができた。

川口ダム自然エネルギーミュージアム

ウォーターサーバーの設置

■ 実施内容

前年の令和5年度に引き続き、熱中症対策の一環としてウォーターサーバーを新たに設置した。

来館者が自由に水分補給できる環境を整えることで、夏季の厳しい暑さの中でも安心して利用できるよう、体調管理を支援するための環境整備に取り組んだ。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

ウォーターサーバー設置後は多くの来館者に利用され、特に家族連れや高齢者を中心に利用が見られた。

来館者が安心して滞在できる環境づくりにつながり、夏季における安全性と利便性の向上に寄与した。

川口ダム自然エネルギーミュージアム

ダム資料展示コーナーの設置

■ 実施内容

お客様からの声に応える形で、
夏休みの自由研究を目的とした来館者に向け、
ダムに関する資料展示コーナーを設置した。

関連資料を一カ所に集約することで、
調べ学習がしやすい環境づくりを行い、
来館目的に沿った利用を支援した。

設置期間：8月3日～



■ 成果（利用者の反応・数値等）

来館者からは
「資料が一カ所にまとまってよかった」
といった声が寄せられ、
自由研究に取り組む利用者の利便性向上につながった。

夏休み期間中の学習ニーズに対応した取組として、
来館者満足度の向上に寄与した。

Ⅱ. 社員同士が互いに意見を言い合える環境を作るために、社員一人一人に誠実に向き合い笑顔あふれる企業をめざすこと

(1) 互いの個性・考えを理解し、同じ目的に向かう

定期的なヒアリングの実施

■ 実施内容

働きやすい職場環境の整備および業務改善につなげることを目的に、全社員を対象とした定期的なヒアリングを年2回（夏・冬）実施している。ヒアリングは人事担当者2名が行い、日常業務における悩みや困りごと、業務量、職場の雰囲気、今後の働き方や将来設計、会社への要望などについて丁寧に聞き取っている。把握した課題については、内容に応じて本人の了承を得た上で上長と共有し、部署内での対応や業務改善を指示している。また、重要度の高い課題については役員会で検討し、組織的な改善につなげている。

■ 成果（利用者の反応・数値等）

ヒアリングを通じて、人員不足を感じやすい時間帯や、時間を要する作業、ミスが発生しやすい業務の見直しが進み、業務効率の向上や負担軽減につながっている。社員が感じている課題や疑問に対して改善を図ることで、働き方の見直しや業務改善が進み、仕事への意欲向上にも寄与している。

また、対象者全員に事前アンケートを実施することで、課題の事前整理やヒアリング時間の短縮など、運用面での効率化も図ることができた。

業務改善への取り組み

■ 実施内容

働く時間の軽減（残業時間の削減・休暇取得の促進）および業務の効率化による生産性向上を目的として、「全社総務会議」において各施設・部署の業務改善に継続的に取り組んでいる。各部署で実施した改善内容や手法、その効果について毎月確認を行い、有用な取組については全社で共有・展開する仕組みを構築している。あわせて、決済システム導入等の電子化の推進や、熱中症対策として送風機ベストを導入するなど、業務負担の軽減と働きやすい職場環境の整備を進めた。

■ 成果（利用者の反応・数値等）

業務改善の取組を継続的に実施した結果、人員不足を感じやすい時間帯や、時間を要する作業、ミスが発生しやすい業務について具体的な見直しが進んだ。業務フローの整理や作業手順の改善により、業務の効率化や負担軽減につながっている。また、改善事例を全社で共有することで、各部署における改善意識が高まり、現場主体での業務改善が定着しつつある状況となっている。

Ⅱ. 社員同士が互いに意見を言い合える環境を作るために、社員一人一人に誠実に向き合い笑顔あふれる企業をめざすこと

(2) 働きやすい環境づくりの実践

① プラチナくるみん認定の継続

■ 実施内容

令和元年 6 月に認定を受けた「プラチナくるみん」について、継続認定を維持するため、仕事と育児の両立支援に関する各種取組を継続的に実施している。

具体的には、

男性の育児休業取得の促進

未就学児を育てる社員を対象とした短時間勤務制度の活用促進など、ライフステージに応じた柔軟な働き方が選択できる環境整備に取り組んでいる。

また、制度の周知にとどまらず、上司や周囲の理解促進にも配慮し、育児と仕事の両立がしやすい職場風土の醸成を図っている。

■ 成果（利用者の反応・数値等）

男性の育児休業取得については、令和 6 年度に 1 名が取得した。取得にあたっては、上司による事前の希望確認や業務引き継ぎの調整を行い、安心して制度を利用できる環境づくりにつながった。

現在は、男性の育児休業取得期間のさらなる延伸を見据え、取得意向の早期把握や業務引き継ぎ支援の仕組みづくりを進めており、今後も制度の実効性を高めながら、誰もが安心して働き続けられる職場環境の整備を推進していく。

②「えるぼし」3 つ星認定の継続

■ 実施内容

女性活躍推進法に基づき、一般事業主行動計画の策定および届出を行い、

女性の活躍推進に関する取組を継続的に実施している。

その結果、「採用」「継続就業」「労働時間等の働き方」

「管理職比率」「多様なキャリアコース」の

5 つの評価項目すべてを満たし、

令和 5 年 5 月 11 日に「えるぼし」3 つ星（認定段階 3）

の認定を受けた。

現在も同認定の継続に向け、

性別にかかわらず能力を発揮できる職場環境づくりに取り組んでいる。

■ 成果（利用者の反応・数値等）

- ・ 正社員に占める女性労働者の割合：43.9%

- ・ 法定時間外労働および法定休日労働の合計時間数：各月すべて 45 時間未満

- ・ 契約社員女性 2 名を正規職員へ転換

- ・ 過去 10 事業年度前および前後事業年度に採用した労働者の継続雇用割合：男女ともに 100%

これらの実績により、

女性が継続して活躍しやすい環境づくりとあわせて、

誰もが安心して働き続けられる職場環境の整備が進んでいる。

Ⅱ. 社員同士が互いに意見を言い合える環境を作るために、社員一人一人に誠実に向き合い笑顔あふれる企業をめざすこと

(2) 働きやすい環境づくりの実践

③ 長時間労働の削減に向けた取り組み

■ 実施内容

勤怠管理の電子化により、
月別・年別の勤怠状況を把握しやすい体制を整え、
業務の繁閑に応じた計画的な年次有給休暇の取得や
適切な人員配置を推進している。
また、各総務担当により、
毎月の残業時間を部署別・個人別に数値管理し、
振り返りを通じて残業の要因分析と対応を行っている。
これまでの業務改善の取組や効率的なリソース配分を踏まえ、
長時間労働の抑制に継続的に取り組んでいる。

■ 成果（利用者の反応・数値等）

平均月残業時間：
令和 6 年度 4.2 時間

繁忙期においても、事前の計画的な人員配置や業務分担により、
過度な残業を伴うことなく業務を進めることができている。
業務集中が生じた部署についても、
状況に応じた対応を行うことで負荷の平準化が進み、
全社的に長時間労働の抑制につながっている。

④ 資格取得の促進

■ 実施内容

業務に必要な専門性の向上および社員のキャリア形成を支援するため、
資格取得補助金支給制度を継続して実施している。
本制度は社員に広く浸透しており、
新入社員に対しては導入研修時に制度の周知を行っている。
実務上必要な資格取得に加え、
若手社員を中心に将来を見据えたキャリア形成や、
各部署で今後必要となる資格の取得に向けた
主体的なチャレンジも増えている。
また、取得した資格の内容に応じて資格手当を給与に反映することで、
資格取得への意欲向上を図っている。

■ 成果（利用者の反応・数値等）

令和 6 年度における制度利用件数：5 件

主な取得・受講実績

- ・ 第 1 種消防設備点検資格
- ・ 語学試験（TOEIC）
- ・ 消防設備士法定講習
- ・ 足場の組立て等作業主任者能力向上教育講習

これらの取組により、
業務に直結する専門知識の向上に加え、
社員一人ひとりが将来を見据えてスキルアップに取り組む
風土の醸成につながっている。

Ⅲ. 地域にとって永年愛される企業となるために、「損得」ではなく「善悪」で行動する健全経営に努めること

① 経営計画書に基づく行動への変化

■ 実施内容

年 2 回の社員総会
(6 月：経営計画発表会、11 月：上期報告会) を
事業所別に開催している。

社員総会では「経営計画書」に基づき、
各事業の進捗状況や自社の課題、
中期計画および単年度計画について共有し、
社員一人ひとりが経営方針を理解したうえで
行動できるよう努めている。
経営計画書を軸に、社員同士の目線を合わせ、
組織として同じ方向を向いて取り組む体制を継続している。

■ 成果（社員の反応や数値等）

経営計画書には、社内ルールや共通用語、
当期の社内信条なども盛り込んでおり、
事業所別に実施することで、
各部署の状況に即した具体的な説明が可能となっている。

その結果、
「会議に集中でき、自分の担当部署の課題がよく分かる」
「社員としてのルールが明確になり、言葉の認識が統一された」
などの声が多く寄せられており、
経営方針の理解促進と行動の統一につながっている。

② 評価システムを使った会社の考えの共有

■ 実施内容

会社の考え方や価値観の共有を一層深めるため、
社員一人ひとりに対して、
絶対評価による人事評価システムを継続して運用している。

各社員の業務内容や状況に応じて、
本人と上司が話し合いながら
上期・下期の行動目標および数値目標を設定し、
中間面談を実施したうえで評価を行うことで、
能力向上とチームとしての目標達成意識の向上を図っている。

また、定期的な面談を通じて進捗を確認し、
目標達成に向けて考えをすり合わせることで、
会社の方針や判断基準の共有を図っている。

■ 成果（社員の反応や数値等）

評価システムにおける面談は、
日常業務の細かな部分について相談できる場として機能しており、
業務の進め方に迷った際や方向性を確認したい場面で
有効に活用されている。

定期的な面談の実施により、
「上司が忙しくて相談しづらい」といった課題の解消にもつながり、
部内のコミュニケーションが円滑になっている。

あわせて、年 2 回、人事部署によるヒアリングも実施し、
多面的な視点から社員の状況把握とフォローを行っている。

あすたむらんど徳島

「ゼロ・カーボンドライブ」の普及活動促進の実施

■ 実施内容

徳島県が目指す「2050 年カーボンニュートラル」の実現および、電気自動車を活用する「ゼロ・カーボンドライブ」の普及促進を目的として、電気自動車（EV）用普通充電設備の運用を開始した。

来園者が園内滞在中に充電できる環境を整備することで、環境負荷の低減とあわせて、EV 利用者が安心して施設を利用できる体制づくりを図った。

実施期間：12 月 17 日～



■ 成果（利用者の反応・数値等）

環境負荷の軽減を意識した EV 車の利用者が増加傾向にある中、来園中に充電ができることから、「安心して長時間利用できる」といった声が寄せられた。

また、災害時には EV 普通充電インフラの提供拠点としての役割も期待され、今後起こり得る大規模災害への備えとして、避難施設としての安心感向上にも寄与する取組となった。

地域作家と来園者をつなぐ体験型マルシェの実施

■ 実施内容

県内で活躍する作家の作品発表の場を創出するとともに、県民がハンドメイド作家の想いや技術に触れる機会を提供することを目的に、「森のマルシェ in あすたむらんど」を実施した。「ナチュラルで暮らしやすいまち」をテーマに、地域性や環境配慮を意識したマルシェとして企画した。夜間まで開催時間を延長し、イルミネーションを目的に来園した来場者にもマルシェを案内することで、新たな来園動線の創出を図った。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：12 月 14 日・15 日

参加者数：13,742 名

当日は低温や小雨など天候に恵まれない状況であったが、森のマルシェを目的に来園する来場者が多く見られた。特に、若いカップルや普段あすたむらんどを利用しない層の来園が目立ち、新たな来園者層への認知拡大につながる取組となった。

また、来園者および出店者双方が、SDGs 目標 No.11「住み続けられるまちづくりを」および No.12「つくる責任 つかう責任」について理解を深める機会を提供した。

あすたむらんど徳島

「エコみらいとくしま」親子ふれあい学習 in あすたむらんどの実施

■ 実施内容

環境学習の機会創出を目的に、
「エコみらいとくしま」親子ふれあい学習 in あすたむらんどを実施した。
環境首都とくしま創造センターより、
徳島県地球温暖化防止活動推進員を講師として招き、
地球温暖化をテーマとした講義と、
体験型プログラム「大空へはばたけ！巨大シャボン玉」を組み合わせた
内容とした。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：9月23日
参加者数：86名

講義では「脱炭素」をキーワードに、
環境問題や地球温暖化について分かりやすい説明が行われ、
当初は難しそうにしていた子どもたちも次第に真剣に耳を傾ける様子が見られた。

体験型プログラムでは、幼児から大人まで幅広い世代が参加し、
遊びを通じて環境問題を身近に感じる機会となった。
本取組により、環境課題を自分事として考えるきっかけを提供することができた。

環境月間エコ工作の実施

■ 実施内容

環境月間の取組として、
ストローの廃材を活用したアイロンビーズ工作の
ワークショップを実施した。
マイクロプラスチックが環境や生態系に与える影響について、
紹介や掲示物を通じて伝えることで、
環境保全の重要性を認識するきっかけづくりを目的とした。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：6月1日
参加者数：60名

工作体験を通じて、家庭でも手軽に取り組める内容となり、
環境問題について家族で考える機会の創出につながった。

あすたむらんど徳島

全日本小中学生ロボット選手権の実施

■ 実施内容

きのくにロボットフェスティバルへの出場に向け、
四国地区の小中学生を対象に、
ロボット製作および競技の予選会を実施した。

競技に勝つために試行錯誤を重ねる過程を通じて、
創意工夫を伴うものづくりに親しむ機会を提供し、
科学技術への関心や挑戦意欲を育む取組とした。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：10月25日・26日
参加者数：小学生15名／中学生6名

地元のロボット専門講師を招き、
ロボット製作初心者でも参加しやすい内容で実施したことで、
ロボットへの心理的ハードルが下がり、
継続的に参加する来館者の増加につながった。

参加者からは、
ものづくりの面白さや達成感を実感できたとの声があり、
次世代の科学技術人材育成に寄与する取組となった。

特別サイエンスツアー「夏休み自由研究を楽しもう」の実施

■ 実施内容

夏休み期間中の学習支援を目的に、
特別サイエンスツアー「夏休み自由研究を楽しもう」を実施した。
科学館スタッフが自由研究の始め方やまとめ方をサポートし、
昆虫・植物・結晶・空気・磁石の5つのテーマについて、
体験を交えながら学べる内容とした。
自由研究に対する不安を軽減し、
楽しみながら主体的に取り組める機会の創出を図った。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：7月13日・20日・27日、8月3日・10日
参加者数：延べ141名

各テーマは事前申込制で実施し、
多くの回で定員に近い申込みが見られた。
複数テーマへの応募も多く、
参加後に別テーマをキャンセルするケースもあったが、
いずれのテーマも参加者満足度が高く、
自由研究への意欲を高める取組となった。

あすたむらんど徳島

キッズ科学教室（前期）「STEAM であそぼう」の実施

■ 実施内容

キッズ科学教室（前期）アドバンストコースとして、「STEAM であそぼう」を全 4 回の連続講座で実施した。参加者が自ら作りたいものを設定し、目標に向けて適切なツールを用いながら作品制作に取り組む内容とした。各参加者に対して学生スタッフが個別にサポートし、コミュニケーションを通じて必要な知識や情報を共有しながら、主体的なものづくりを支援した。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：5 月 25 日、6 月 1 日、6 月 22 日、7 月 5 日
参加者数：5 名

全 4 回の講座を通じて、参加者はスタッフと対話しながら作品制作に継続して取り組み、ものづくりへの理解を深めることができた。少人数制による丁寧な支援により、参加者それぞれが十分な成果を得る取組となった。

キッズ科学教室（後期）

「科学の扉を開け！子どもサイエンスショー」の実施

■ 実施内容

連続講座として、サイエンスコミュニケーターによるサイエンスショーの実演指導を行い、サイエンスフェアにおいて発表の機会を設けた。科学の内容を「分かりやすく・楽しく伝える」ことを重視し、構成や表現方法について実践的に学ぶプログラムとした。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：11 月 9 日
参加者数：5 名

サイエンスショーを通じて、科学を楽しみながら伝える体験を行うことができた。参加者同士が励まし合いながら取り組むことで、練習以上の実演成果を発揮し、地域の科学館活動を担う意識を育む機会となった。

本取組は、地域に根ざした学びの創出と、持続可能なまちづくりにつながる人材育成に寄与するものとなった。

あすたむらんど徳島

「サイエンスフェア 2025」の実施

■ 実施内容

県内の企業・学校あわせて 22 団体の協力を得て、科学にまつわる工作や実験体験ができる体験型ブースを出展した。紙飛行機づくりやレジンアクセサリ制作、VR 体験など、子どもから大人まで幅広い世代が楽しめる多様な内容とし、来場者が気軽に科学に触れられる学習機会を創出した。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：11 月 8 日・9 日

参加者数：延べ 3,323 名

各ブースを近接して配置したことで、目当ての体験後も他のブースへ自然に移動する来場者が多く見られ、会場全体の賑わいにつながった。8 日は天候にも恵まれ、制作した紙飛行機を屋外で飛ばして遊ぶ姿も見られるなど、体験を通じた主体的な学びと交流が促進された。本取組は、地域に開かれた学習機会の創出につながるイベントとなった。

「移動科学教室」の実施

■ 実施内容

僻地・遠隔地の学校を対象に、出張型サイエンスショーおよび実験工作を実施した。1 校あたり 45 ～ 60 分間のプログラムとし、サイエンスショー（約 30 分）と実験工作（15 ～ 30 分）を組み合わせ実施した。サイエンスショーでは、空気・静電気・光・色など、学習指導要領に含まれる単元を取り上げ、現象を予想させながら実験を進める構成とした。実験工作では、ペットボトルと風船を用いた空気砲を制作し、体験を通じて理解を深める内容とした。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：11 月 25 日

参加者数：24 名

問いかけを中心とした進行により、すぐに答えを示さず児童・生徒自身に考えてもらうことで、実演を交えた一体感のある学びの場を創出することができた。出張形式で実施することで、地域や立地条件による学習機会の差を補う取組となった。

あすたむらんど徳島

実体験を通じたキャリア教育プログラム「明日多夢子ども会社」の設立

■ 実施内容

子どもたちが「仕事とは何か」「お客様に喜んでもらうために何が必要か」といった働くことの本质について考える機会を提供するため、「明日多夢子ども会社」を設立した。商品開発から販売までの一連の流れを体験するプログラムとし、実践を通じて主体性や責任感、社会との関わりを学ぶことを目的とした。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：9月14日～3月8日（全13回）
申込者数：10名

参加者は、商品内容や価格設定、役割分担についてチームで話し合いながら活動し、仕事の仕組みや協働の大切さを学んだ。試行錯誤を重ねる中で、考える力や協働する力を育む機会となり、将来につながる「生きる力」を養う取組となった。

ファミリーサイエンス教室

女子中高生の理系進路選択支援プログラム「実験体験」の実施

■ 実施内容

ファミリーサイエンス教室として、女子中高生の理系進路選択支援を目的としたプログラム「実験体験 科学館で藍染体験！～藍染のふしぎを体感しよう～」を実施した。技の館・瀬部氏および四国大学・有内氏の協力のもと、藍や藍染の仕組みについての解説を行った後、実際にハンカチを用いた藍染体験を実施し、科学的視点とものづくりの楽しさを体感できる内容とした。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：9月21日
参加者数：18名

完成後の仕上がりを想像しながら、家族で楽しそうに制作に取り組む様子が見られた。参加者アンケート（回答数11件）では、「とてもおもしろかった」8件、「おもしろかった」3件と高い評価を得ており、理系分野への関心を高める満足度の高い取組となった。

あすたむらんど徳島

海洋生物の多様性を学ぶ体験型ファミリーサイエンス教室の実施

■ 実施内容

ファミリーサイエンス教室として、
「チリメンモンスターをさがせ！」を実施した。
チリメンに関する講義の後、
徳島県産および和歌山県産のチリメンを比較しながら観察を行い、
海洋生物の多様性や地域による違いについて学ぶ内容とした。
また、発見した生物を用いたコレクションカードの作成や、
UV レジンを使ったストラップ制作を行い、
楽しみながら学べる体験型プログラムとして実施した。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：10月12日
参加者数：25名

普段口にしていないチリメンの中から、
見慣れない生き物を探す体験に参加者は夢中になり、
発見した生物に喜ぶ姿が多く見られた。
家庭でも調べてみたいとの声があり、
チリメンの持ち帰りを希望する参加者も見られるなど、
学習意欲の向上につながる取組となった。

昆虫展示を通じた環境学習プログラム「むしむし探検隊」の実施

■ 実施内容

夏季企画として、
「むしむし探検隊～めざせ甲虫マスター～」を実施した。
パネル展示や標本、生体展示を通じて、
甲虫を中心とした昆虫への興味・関心を高める内容とした。
また、あすたむらんどでも確認されている
外来生物・クビアカツヤカミキリの標本展示を行い、
生態系への影響や外来種問題について紹介した。
あわせて、腐葉土の作成や花壇での活用など、
園内で取り組んでいる土壌循環の仕組みを紹介し、
環境保全への理解を深める機会とした。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：8月1日～8月24日
参加者数：21,182名

実施期間中は
「昆虫のイベントはどこで行っているのか」といった
問合せが多く寄せられ、
展示されている標本や生体を見て喜ぶ来館者の姿が多く見られた。
夏休み期間中の来館動機として高い関心を集め、
環境や生きものへの理解を深める大規模な学習機会となった。

あすたむらんど徳島

古代の南極の氷がやってくる！の実施

■ 実施内容

夏季特別企画として、
「古代の南極の氷がやってくる」を実施した。
南極観測を支援する砕氷艦「しらせ」が持ち帰り、
南極大陸・昭和基地近くで採取された
数万年前の雪が凍結した氷について、
自衛隊より寄贈を受け展示した。
あわせて、自衛隊が災害派遣時に使用する車両を展示し、
記念撮影や関連グッズの配布を行うなど、
体験を通じて学べる展示構成とした。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

実施期間：8月3日

参加者数：470名

南極の氷に直接触れる体験や、
自衛隊車両への搭乗・撮影を通じて、
地球環境や極地への関心を高める機会を提供した。
子どもから大人まで世代を問わず楽しむ姿が見られ、
環境理解を深める学びにつながる取組となった。

渦の道・大鳴門橋架橋記念館

観光資源・文化資源を活かした体験型企画の実施

■ 実施内容

地域文化の発信および利用満足度の向上を目的に、
阿波おどりイベントを実施した。
国内外から訪れる観光客に徳島の伝統文化を
身近に感じていただけるよう、
来場者が観覧しやすい場所で演舞を行うとともに、
写真撮影や簡単な踊り体験を取り入れた参加型の内容とした。
本取組は、地域文化の継承と観光振興の両立を図るものであり、
SDGs 目標 No.11「住み続けられるまちづくりを」および
No.8「働きがいも経済成長も」に貢献する取組である。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

国内外の来場者から好評を得ており、
「徳島らしさを体感できた」「旅の思い出になった」などの
声が寄せられた。
観るだけでなく体験を通じて阿波おどりに触れる機会となり、
利用満足度の向上および再来訪意欲の醸成につながった。

川口ダム自然エネルギーミュージアム

本社事業

親子バスツアー「とくしま自然エネルギー探検隊」の実施

環境配慮・SDGs をテーマとしたイベント・マルシェの企画運営

■ 実施内容

川口ダム自然エネルギーミュージアムが立地する那賀町の魅力を広く発信し、観光を通じた地域経済の活性化を目的に、1泊2日の親子バスツアー「とくしま自然エネルギー探検隊」を開催した。自然エネルギーをテーマとした学習に加え、地域資源を活かした体験プログラムを組み合わせ、親子で楽しみながら学べる内容とした。

■ 実施内容

レジ袋有料化以降、エコバッグの持参が定着する中、エコバッグ自体についても環境に配慮した素材を選択し、より持続可能な行動につなげることを目的に取組を実施した。とくしまマルシェ 15 周年の節目にあわせ、記念品として環境配慮素材を使用したエコバッグを会場で販売し、来場者が日常生活の中で SDGs を意識するきっかけづくりを図った。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

SUP 体験や発電所見学など、「普段は体験できない内容が体験できて良かった」といった声が寄せられた。前年からのリピーター参加も見られ、満足度の高い体験型プログラムとして定着しつつある取組となった。本取組は、SDGs 目標 No.11「住み続けられるまちづくりを」に貢献するものである。

■ 成果（利用者の反応・数値等）

購入者からは、「デザインがかわいく、環境に配慮した素材なので今後も使いたい」「マルシェの商品がたくさん入るため、来場時の必需品になった」といった声が寄せられた。日常的な利用を通じて環境配慮行動が促進され、来場者の SDGs への関心を高める取組となった。

本社事業

誰もが安心して楽しめるインクルーシブなイベント運営の実施

■ 実施内容

11月2日開催の「徳島おどりフェスタ 2025」において、車椅子利用者を含むハンディキャップをお持ちの方にも安心して参加いただけるよう、インクルーシブな視点に基づくイベント運営を行った。長時間快適に観覧できるよう、観覧エリアの設定・確保、誘導および動線案内、各種問合せへの対応内容に至るまで、多角的なお客様目線を重視した運営体制を整えた。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

寒冷期の開催であったが、「お手洗いに安心して行けるよう誘導してもらえ、落ち着いて楽しめた」といった声が寄せられた。開催時間中に離席される来場者は見られず、多くの方が長時間にわたりイベントを満喫される結果となった。

次世代に向けた体験・理解促進型展示案内の実施

■ 実施内容

12月1日、徳島県庁にて開催された「EXPO LEGACY TOKUSHIMA 感謝展」オープニングにおいて、地元・富田小学校の全児童を対象とした展示案内を実施した。小学校1年生から6年生までの幅広い年齢層に配慮し、分かりやすい言葉遣い、表現、話すスピードを意識した案内を行った。大阪・関西万博「徳島県ゾーン」を五感で体感できるよう工夫し、年齢や国籍を問わず誰もが興味を持って楽しめる展示環境を整えた。



■ 成果（利用者の反応・数値等）

来場者は、万博を訪れた経験のある方は感動を振り返りながら、未訪問の方は想像を膨らませながら展示を楽しんでおり、記念撮影を行う姿も多く見られた。世代を越えて万博への関心と理解を深める機会となり、次世代への学びと体験の創出につながった。

本社事業

玉ねぎサイエンスショー

■ 実施内容

専門的な知識を有するスタッフによるサイエンスショーを実施し、実験や演出を通じて科学の面白さや不思議さを、子どもから大人まで幅広い来場者に分かりやすく伝えた。

また、開催地である淡路市の名産品「玉ねぎ」をテーマに取り上げ、地域の特色や自然資源に触れながら学べる内容とすることで、科学教育と地域理解を組み合わせた体験機会を創出した。

実施期間：4月12日～13日



■ 成果（利用者の反応・数値等）

迫力のある実験演出や身近な題材を用いた解説により、来場者が楽しみながら科学に親しむ様子が多く見られた。特に子ども連れの家族からは「難しい内容も分かりやすかった」「身近な食材で科学を学べて面白い」といった声が寄せられ、科学への関心喚起と学びのきっかけづくりにつながった。

こども自動車教習所

■ 実施内容

ソーラーパネルを搭載したバッテリーカーを使用した「こども自動車教習所」を開催し、子どもたちが実際に運転を体験しながら、クリーンエネルギーや交通ルールについて学べる機会を提供した。再生可能エネルギーを活用した車両を使用することで、環境に配慮したエネルギーの大切さを身近に感じられる内容とするとともに、横断・停止・標識の確認など、日常生活に直結する交通ルールを体験的に学べる構成とした。

実施期間：5月4日～5日 / 11月9日



■ 成果（利用者の反応・数値等）

運転体験を通じて、子どもたちが楽しみながら交通ルールや安全意識を学ぶ姿が多く見られた。保護者からは「遊びながら交通ルールを学べるのが良い」「環境の話も自然にできた」といった声が寄せられ、交通安全意識の向上と環境理解の双方につながる取組となった。

本社事業

GW/ お盆 特別公演 阿波おどり

■ 実施内容

特別企画として、400 年以上の歴史を持つ徳島県を代表する伝統芸能「阿波おどり」の特別公演を実施した。来場者が気軽に観覧できる構成とすることで、県内外の来場者に徳島の文化を身近に感じていただく機会を創出するとともに、地域文化の継承と観光資源としての魅力発信を目的とした。

実施期間：5 月 5 日 / 8 月 14 日～ 8 月 15 日



■ 成果（利用者の反応・数値等）

来場者からは
「徳島らしさを感じられた」
「旅行の良い思い出になった」
といった声が寄せられ、
伝統文化に触れる体験を通じて満足度向上につながった。
また、観光期における文化発信の取組として、
地域文化を活かした持続可能な観光振興の一助となる成果が得られた。

サイエンスショー

■ 実施内容

夏休み期間中の集客および学習機会の創出を目的に、専門的な知識を有するスタッフによるサイエンスショーを実施した。

迫力ある実演を交えながら科学現象をわかりやすく紹介し、来場者が科学を身近に感じられる構成とした。
また、来場者が実際に参加・体験できる内容を取り入れることで、楽しみながら学べる機会の提供を図った。

実施期間：令和 7 年 8 月 14 日～ 15 日



■ 成果（利用者の反応・数値等）

参加型の演出により、子どもから大人まで幅広い年代の来場者が興味を持って観覧する様子が見られた。
「実験が面白かった」「また見たい」といった反応もあり、
科学への関心を高めるとともに、
学びと体験を両立したイベントとして満足度向上につながった。